

である。評価が最近話題になるが、(教員の自己満足だけでなく、また学生評価だけでもなく)、学習の効果があつたかどうか、学生の学習の質に前進がみられたかどうか、これを客観的に測ることを機軸とすべきであろう。

7) 最後に、私の持論として、「教育とは感動を与えること」、この言葉をこれからも座右の銘としたい。

全学共通科目の数学系と統計学系の現状と課題について

理学部 数学科 浅野和雄

全学共通科目の数学系と統計学系の科目は、理学部、教育人間科学部、工学部の数学担当の教員と、経済学部、農学部、医学部保健学科の教員各1名および工学部のいくつかの学科対象の数理演習に、工学部のそれぞれの学科の教員数名で担当している。これは正確には調べてはいないが、同規模の国内の大学と比較したとき、新潟大学は数学系と統計学系の担当教員数が非常に少ないように思われる。

それに付随して、開講コマ数も制限され、半期2単位を1コマと数えると、数学系では概論科目は4コマ、旧主題科目は4コマ、主に理学部対象の数学基礎科目が4コマ、工学部対象の数理基礎科目が12コマ、その他が2コマで、統計学系では概論科目が6コマ、その他が2コマ開講している状況である。

平成6年度と比較すると、数学系では概論科目は7コマ、旧主題科目は4コマ少なくなっている。これは大きな問題である。もともと数学系の教員が少ないにもかかわらず、定削で減ったため、そのしわ寄せがここにきている。数学および統計学が専門科目で必要となる、主に農学部および教育人間科学部その他の学生対象に、もう少し概論科目を開講したいものと常々思っているのは小生1人ではないと思う。

このような状況ではあるが、平成12年度に、新潟大学プロジェクト推進経費の交付を受けて、教養教育における数学・統計学のカリキュラムを検討した。昨年度も理学部でのFDで、その結果を他の教員が話している。現在でもあまり変化はないと思うので、今回もそのときの結果の一部と追加を述べたい。そのときは

まず受講状況・要望等についてアンケートをとり、冊子にて報告している。アンケートに回答した調査対象者は1,371人で、その時間帯全聴講者2,057人の66.7%であった。また対象者の90%以上の1,258人が新入生で、その年度の入学者全体2,466人の51.0%であった。学系別に見て、この調査標本数は、教養科目(当時)を聴講している学生全体の意見を、十分に反映していると考えられる。理系の学生は約80%の学生は数学系・統計学系の科目を受講しているが、文系の60%の学生は全然受講していなかった。受講しない一番の理由は不得意な科目ということだった。しかし本学に進学してくる学生の約8割の学生は中学校までは数学の成績は中の上以上で、高校の途中からわからなくなり、嫌いになってきているようで、このことが解決されたらもっと受講者は増えると思われる。どの科目、分野でつまずいたかも浮き彫りになったが、ここではそれは省略する。今後の課題として、数学という学問の本質とその有用性を、なるべく具体的に身近な話題を題材として取り上げ、理解させる必要があるようである。

13年度に上のことを受け、理学部、教育人間科学部、工学部の何人かの先生と数回会議をもったが、新潟大学における数学・統計学担当の教員の絶対数が非常に少ないことも関係し、今までと別の講義とか、だいたい同じ内容でもコマ数を増やして講義を行うとすることができなかった。ただ定員数は14年度からいくつかの科目で増やすようにした。

「入学時学生の物理の基礎」

工学部 材料物性工学 合田正毅

頂いたテーマを広く解釈して、以下のような骨組みで、新潟大学での教養科目及び専門基礎科目に付いての話をした。

(1) 入学時学生の学力低下の背景

この話の更に背景には、高度成長経済期後の長期低迷期の中で国民がモチベーションを喪失していることや、長期少子化傾向がある。国民の学問や芸術への無関心、家庭教育の崩壊、多人数教育の弊害、等が国の